

ダウトゲーム

五十嵐貴久

第六回

24

東急池上線旗の台駅まで移動し、近くにあったパーキングにミニクーパーを停めた。落ち着いて話を聞きたかった。

駅から二百メートルほど離れたファミレスに入り、ドリンクバーを二つ注文してから、改めて有美を見つめた。

「聞きたいことが山のようにあります。法務省勤務ということですが、どうしてもが刑事だと知ってるんですか？ なぜあそこにいるんです？ ぼくの名前をどうやって知ったんです？」

「妹さん……紀子のりこさんに伺いました」

「紀子に？ 知り合いなんですか？」

いえ、と有美がアイステイーにストローを差し、最初からお話しますと座り直した。

「片山興産かたやまの社員が自殺したというニュースをテレビで見ました」
先週の土曜日です、と有美がグラスにミルクを注いだ。

「ネットで調べましたが、詳しいことはわかりませんでした。自殺ですから、情報がないのは当然かもしれません。ただ、会社がコメ

ントを出していないのは不自然な気がしました」

たかむらよしお
「高村良雄のことですね？ どうしてあなたは彼の自殺について調べようと考えたんですか？」

順番に説明します、と有美がストローの端を噛んだ。

「高村という人物について、わたしは何も知りません。部長という肩書がネットに載ってましたが、片山興産の社員で名前がわかっているのは真田社長と数名の役員だけです。理由があって、以前から片山興産のことを調べていました。あの会社で何か起きてるのではないかと思ひ——」

「そう思った理由は？」

待つてください、と有美が右手を上げて制した。

「法務省には人事交流で警察庁から派遣されている男性職員がいます。彼に頼んで、事件の詳しい情報を教えてもらいました。翌日、現場の品川のマンションへ行っただんです」

「何のためです？ 警察庁のキャリアなら、高村の住所を調べるのは簡単だったでしょう。ですが、あなたが現場へ行っても何もできなかったはずですよ。それはわかっていたでしょう？」

はい、と有美がうなずいた。自殺は変死扱いになります、と志郎しろうは言った。

「部屋は封鎖され、立ち入り禁止になってましたし、マンションへ

の出入りも警察の許可が下りない限りできません。誰でも入れる自殺現場なんてありませんよ」

「その通りです。後先考えずにマンションへ向かいましたが、近づこうとしただけで立っていた警察官に睨にらまれました。でも、無駄ではありませんでした。マンション近くから様子を窺のぞっていると、わたしに気づいた刑事さんが声をかけてきたんです。不審人物に見えるたのかもしれない」

「そんなことはないと思いますが……」

「それが橋口はしぐち紀子さんでした」あなたの妹さんです、と有美が言った。「最初は新聞記者かテレビ局の報道部員だと思いました。わたしの中で、紀子さんと刑事のイメージが結びつかなかったんです。紀子さんの方も、わたしを怪しんでいたと思います。身分証を提示して法務省外局の出入国管理庁の職員だと伝えると、同じ公務員だったんですねと苦笑していました」

「話をしたんですか？」

「高村という片山興産の社員の自殺について、詳しい事情を教えてくださいとお願ひしました。わたしがあの会社のことを調べている理由を話すと、うなずいていました。紀子さんも自殺ではないと思っていたんです。婚約者の春野博美はるのひろみさんと会ったことも話してくれました。春野さんの話を聞いて、自殺はあり得ないと考え、あなたに

も話したと……」

「それはぼくもわかっています。ですが、証拠はなかったんです」

あなたも春野さんの話を聞いたそうですね、と有美が顔を上げた。

「紀子さんは春野さんと高村さんの関係が良好だったと感じていました。女性は同性の嘘に敏感です。春野さんの言葉に嘘はなかったと思うと話していました。少なくとも、それが自殺の原因ではないはずだと……そうになると、考えられるのは仕事関係のトラブルです」

心証は重要ですよ、と志郎は苦笑いを浮かべた。

「いわゆる刑事の勘ですが、馬鹿にできないと経験でわかっています。しかし、勘だけで動くわけにはいきません」

「根拠がある、と紀子さんは言っていました」部屋には鍵がかかっていたが、と有美がポケットから取り出した手帳の頁を開いた。「本人が施錠せじょうしたと断定はできなかった。そうですね？ 誰かがスペアキーを持っていたのかもしれないし、ピッキングその他の方法で閉めることもできた。高村さんの鍵はマンション室内で見つかっているが、第三者の関与があったのかもしれないと疑っていたんです」

「可能性なら、何でも言えますよ」

第三者がマンション内にいたことは証明できると言っていました、と有美が手帳の別の頁をめくった。

「エレベーターの防犯カメラに五人組の男が映っていましたが、他

の部屋にその五人が行っていないことを紀子さんが全戸を回って確認したんです。残っているのは高村さんの部屋だけです。時間を考えると、その五人が高村さんの死に関与していた可能性は高いと思います」

「さあ、と肩をすくめた志郎に、インコのこともあります、と有美が早口になった。

「高村さんがそのインコを可愛がっていたのは、春野さんも証言しています。自殺なら、なぜ餌えさを入れておかなかったんでしょう？」
「考える余裕がなかったからです、と志郎は言った。

「自殺を決めた人間は、それだけで頭が一杯になります。何も考えられなくなっていたのかもしれませんが。むしろ、その方が普通でしょう」

「ですが、おかしな点が多過ぎませんか？ 偶然とは思えません。高村さんの死は自殺ではない、と紀子さんは確信していました。わたしも同じです。五人の男が高村さんを殺し、自殺を偽装ぎそうした……：……そうとしか考えられません」

「何のために？ その五人は誰なんです？」

顔見知りだったんでしょう、と有美が言った。

「強引に押し入ったとすれば、高村さんも助けを求めて叫んだはずです。無理やり入ったのではなく、来意を告げ、高村さんがドアを

開けたんです。部屋で何があったのかはわかりません。話をしたのか、問答無用で襲ったのか……五対一です。襲われれば抵抗できなかったでしょう。叫んだのかもしれない。隣室の住人が声を聞いています。でも、口を塞がれ、取り押さえられた。荒れた部屋は彼らが片付けた。誰も部屋に来ないとわかっていた。悠々と、丁寧にその作業をした。時間はあつたんです」

「証拠はありません。それはあなたと紀子の想像に過ぎないんです」
もうひとつ言えば、と有美が人差し指を立てた。

「高村さんとその五人は話し合った、とわたしは考えています。高村さんの体に目立った外傷はなかったそうですが、それは抵抗しなかったことを意味します。自殺を示唆され、高村さんはそれを受け入れた。理由はわかりませんが、そうは考えられないでしょうか」
考えられませんね、と志郎は首を振った。

「自殺を強制されて、従う人間はいませんよ。五人の男に力づくで押さえ付けられれば、抵抗はできません。外傷がなかったのはそのためだ、と考えるべきです」

そうでしょうか、と不満げに有美がアイステイーを飲んだ。仮に、と志郎は言った。

「五人の男が高村さんを殺し、自殺を偽装したとしましょう。しかし、何のためにそんなことを？ あなたの説に従えば、五人はその

後もしばらく部屋にいたことになりす。殺人犯は一刻でも早く現場から逃げようとしす。ぼくも素人じゃありません。殺人犯の心理はわかります」

「高村さんの部屋を徹底的に調べたはずだ、と紀子さんは言っていました」パソコンやスマホなどのデータが改竄かいざんもしくは消去されていた可能性についても教えてくれました、と有美が言った。「彼らにとって都合な何かを、高村さんが保管していたとすれば、それを発見、隠滅いんめつするのが目的だったのでは？ 最後に犯人たちは遺書を作ってパソコンに残しましたが、すべてが終わるまで数時間は必要だったでしょう」

「偽装工作をしても、警察の目はごまかせません」鑑識かんせきが調べています、と志郎は肩をすくめた。「プロの目は節穴ふしあなじゃありません。不審な点があれば必ず気づきます」

彼らもプロだったんでしよう、と有美が首を振った。

「五人の男は組織的かつ効率的に行動し、あらゆる痕跡こんせきを消していった。室内はきれいだったと紀子さんは言っていました、徹底的に掃除機をかけたとすれば筋が通ります。すべては計画的な犯行だったんです。後処理についても十分に考えていたでしょう。経験があったのかもしれませんが。警察にもわからないほど完全な偽装をした、そうは考えられませんか？」

あり得ません、という言葉を支郎は呑み込んだ。ベテラン鑑識官が殺害に加わっていたとすれば、痕跡を消すのは不可能と言えない。

それは極端過ぎるが、あの時現場にいた刑事や鑑識官は、状況から高村は自殺だと考えた。常識で言えば、他の理由はあり得ない。

だから、自殺という前提で室内を調べた。先入観があったのは、志郎自身もそうだったから確かだ。現場で最も危険なのは先入観を持つことで、何らかの形で間違いや見落としが起きやすくなるのは、経験的にわかっていた。

「インコの餌のことがなければ、確信は持てなかっただろうと紀子さんは話していました。でも、そうなる新たな疑問が出てきます。そこまで完璧な偽装工作をできる犯人が、なぜインコをそのままにしていたのか、それがわかりません」

「そうですよ、矛盾しています。やはり高村さんの死は自殺で――」

紀子さんはその答えも持っていました、と有美が微笑^{ほほえ}んだ。

「犯人たちはインコを見過ごしていたわけではなかった。ただ、高村さんの死体が発見されるのは、もっと後になるはずだった。犯人たちは高村さんの交友関係を把握していた。恋人である春野博美さんのことも、彼女がイベント会社に勤務していて、月曜まで高村さんの部屋を訪れないと知っていた。数日後、春野さんが部屋に入った時にインコの餌がなくなっても、おかしいとは思わない。イ

ンコを殺せば、それが別の疑いを招くかもしれない。放っておくべきだと考えた……それが紀子さんの答えです」

「しかし……」

ですが、犯人たちにとって想定外の事態が起きました、と有美が先を続けた。

「マンションの住人が伝染病に感染したことです。その男性はナイジェリアから帰国後、発熱、吐血^{とけつ}その他の症状が出たため、119番通報しています。コロナウイルスの流行で常識になりましたが、感染症の患者及び自宅、濃厚接触者も消毒の対象になることが法律で決まっています。医師たちは強制的にマンションの各部屋に入室できたし、それは義務でもあったんです。感染症がどこまで拡大するか、それは専門家でも予測できません。高村さんの死体が犯人たちの計画より早く発見されたのはそのためです」

志郎はコーヒーを飲んだ。舌に残ったのは苦みだけだった。

「犯人たちは組織的に動いています。証拠は何も残していません」有美が声を低くした。「冷静で計画的な犯行です。当初、紀子さんは反社組織の構成員による殺人と考えていましたが、わたしと会った時には違うようだと話していました。確かに、粗暴犯やチンピラにできることではないと思います。片山興産に社名変更するまで、暴力団組長が社長を務めていたのはわたしも知っていましたが、何か

トラブルがあったとしても、あんな周到なやり方で殺したりはしないでしょう。単に殺すだけなら、もっと簡単に殺せたはずです」

「紀子は……妹は誰が殺害したか話してましたか？」

「それを調べていると言っていました。わたしも片山興産について知っていることをすべて伝えました」

「そこがわかりません」どうして片山興産のことを知ったんですか、と志郎は尋ねた。「三多摩の奥にある建設会社です。出入国管理官とは関係ないでしょう」

それも説明します、と有美が言った。カップが空になっていたが、志郎は話の続きを待った。

25

社長室の窓際に並んでいた観葉植物に水を注いでいると胸ポケットが震えた。着信名を確認してから、真田は画面をスワイプした。

「桑山くわやまです。警察があの男を取り逃がしました」

荒い呼吸音が聞こえる。真田はスマホを持ち替えた。

「作戦は順調に進んでいたのです」桑山の声が低くなった。「警察には私が通報しました。あの男が女を殺すところを見た……七、八人の刑事が追っていたのですが、途中で妨害が——」

「妨害？」

女です、と桑山が言った。

「女があつた男を助けたんです。車をつけていたんでしょ。今、身元を調べていますが、我々が現場に駆けつけた時には逃げていました。中古のゴルフに乗っていたようですが、ナンバーは不明です」

「どうかな、と真田は窓のブラインドを降ろした。

「それだけでは予想のつけようがない」

「警察が行方を追っています。内部協力者と連絡を取り、詳しい情報を出せと伝えましたが、まだ見つからないようです。あの男は何をするつもりでしょう？」

現時点ではわからない、と真田は水差しを取り上げ、ベンジャミンの葉に直接水をかけた。

「だが、困った存在なのは確かだ。対処する必要がある」

「はい」

「我々に橋口を探す余裕はない。人的にも、時間的にもだ。警察に拘束させればいい。その間に我々は計画を実行する。今から四十時間、誰も気づかなければ問題ない」

「その通りです」

「これも想定内だ。対抗措置は立案済みだ。君が直接担当してくれ。ミスは許されない。わかっているな？ 余計面倒なことになる。作戦の根幹に関わってくるだろう」

必ず任務を全うしますと答えた桑山に、そんなに気負うことはないと言った。

「相手は女子供だ。傷つける必要はない。身柄を押さえるだけだ」
「準備は整っています。今から向かいます」

頼む、とだけ言って真田は通話を切った。黄色く変色したベンジヤミンの葉を無造作にちぎり、そのままゴミ箱に捨てた。

26

「わたしは一九九一年生まれで、福井県の出身です。地元の大学に通っている頃から、県会議員の城下先生しろしたの私設秘書を務めています」

有美が話し始めた。福井、と志郎は首を傾げた。

「大学生でも県会議員の秘書になれるんですか？」

「正式な身分ではありません」報酬もゼロで、一種のボランティアです、と有美が微笑んだ。「地方都市では珍しくありません。どこでも同じだと思います」

「政治的な活動をしていたんですか？」

違います、と有美がはっきりした口調で答えた。

「そんなに身構えないでください。城下先生の政治的な立場にわたしは関係ありません」

「ですが、政治家の秘書をしていたんですよね？」

「城下先生は元弁護士で、県議会内で超党派の議員が作った拉致被害者の家族の会の副会長をされていました」

「拉致被害者？ 梨緑共和国の？」

梨緑共和国、正式には梨緑国家民主共和国は東南アジアの一角に位置する社会主義共和国だ。第二次世界大戦後、陸軍将校の梨緑一リ・リヨキがクーデターを起こし最高指導者となり、現在は孫の梨百緑リ・ニヨクが独裁者の座に就いている。

そうです、と有美がうなずいた。

「一九九四年、わたしの兄は梨緑国の工作員に拉致らちされました。当時九歳で、わたしとは六歳離れています。ある日突然、わたしの前から姿を消しました。両親は県や警察に拉致を訴えましたが、取り合ってもらえませんでした。城下先生はわたしたちの唯一の相談相手でした。その関係で、わたしは拉致被害者家族の会に参加するようになり、そのまま先生の私設秘書になったんです」

「そういうことですか」

「大学卒業後、わたしは先生の勧めもあって公務員試験を受け、法務省に入省しました。同じ頃、先生は民自党の公認を受けて参院選に出馬し、当選して参議院議員になっていました。先生の働きかけで、法務省の上司は拉致被害者家族の会でのわたしの活動を認めて

くれました。もちろん、極力仕事に支障を来さない範囲、という条件付きですが、ある程度自由に動けるようになったんです」

有美が名刺をテーブルの上に置いた。竹内たけうち有美という名前の横に、法務省入国管理局特別入国警備官という肩書があった。

「現内閣は拉致問題の解決に強い意欲を持っています。はっきり言えば、誰が総理大臣になってもこの問題を避けて通ることはできません。与党、野党、全国会議員が同じです」

「わかります」

「城下先生がわたしに法務省入りを勧めたのは、一般の会社より調査活動が自由にできると考えたからです。先生の配慮で、被害者家族の会の活動を優先したこともあります。両親の代わりに全国を飛び回り、海外へも行きました。何百人もの人と会い、十年近く調査を続けています。ほとんど何もわかっていません。国家的な規模の事件なので、踏み込めない部分も多いんです」

「ぼくも警察の人間ですから、事情は理解しているつもりです」詳しいわけではありませんが、と志郎は頭を掻いた。「日本人として、警察官として恥ずかしいと思っています」

いいんです、と有美が手を軽く振った。

「一昨年の一月、福井に帰った時、ある老人から被害者家族の会に訴えがありました。その方は七十年代に娘さんを拉致されていたん

です。当時は拉致そのものが公に認められていませんでした。その方……Aさんと呼びますが、Aさんは一人で娘さんを探し続け、九十年代の終わりにようやく政府から特定失踪者と認定されました。二〇〇九年の総理訪梨にも自費で同行しています。Aさんは二十年以上梨緑語を学び、訪梨の際に民間人と接触しました。その時、ある人物の写真を見たそうです。軍に所属している将校で、その男が約五十年前に自分の娘を拉致した人物だとわかったと……Aさんは娘を奪われた際、犯人の顔を見ていたんです」

「わかりますが、それは——」

「証拠にならないのはその通りです。五十年前の記憶ですし、Aさんは犯人の顔を一瞬しか見ていませんでした。それだけでは告発できないとAさんもわかっていましたが、確信があるだけ悔しいと……訪梨していた政府関係者からは、今は耐えてほしいと説得されたそうです。政治的配慮が必要な時期だったのは確かで、他にも拉致被害者がいましたから、諦めるしかなかったんです」

「将校を告発しても、事態が紛糾ふんきゆうするだけだ……そう考えたんですね？」

「でも、Aさんは帰国後も捜索を続けました。娘さんは福井に住んでいましたが、新潟を旅行中に拉致されています。Aさんはその後何年もかけ、新潟県内の会社をしらみつぶしに調べました。あの将

校が出入りしているかもしれない、と考えていたからです」

雲を掴むような話ですね、と志郎は首を振った。

「気持ちわかりますが、見つかるとは思えません。新潟県内にどれだけの会社があるか……数万以上かもしれません。個人で調べるのは限界があります。その将校が日本に来ているかどうかもわからないわけですよね？ それで調べると言っても……」

もうしゅう 妄執ただったとしか言えません、と有美が顔を伏せた。

「他に辿たどるべき線がなかったためかもしれません。Aさんはその将校の写真を持っていなかったの、頼れるのは自分の記憶力と目だけです。訪梨から帰国してすぐ、被害者家族の会にも支援の要請があったそうですが、断わらざるを得なかったと聞いています。二〇一〇年から約九年間、Aさんは一人で新潟県の会社を回り続けました。誰もAさんの話に耳を貸さず、協力してくれる者もいない……孤独な戦いだったと思います。ですが、二〇一九年の春、ある会社を訪れた時、Aさんは長年探し続けていた将校を見つけたんです」

「信じられません。確かに九年は長い時間ですが、そんな偶然が起きるとは……確証はないんでしょう？」

思い込みだったのかもしれませんが、と有美が言った。

「一昨年の一月、Aさんが被害者家族の会を訪れたのは、詳しく調べてほしいと頼むためでしたが、その直後に脳溢血で倒れ、亡くな

られました。正直に言えば、最初はわたしもAさんの話を信じられませんでした。Aさんが話していたのは、新潟市内の片山興産という建設会社の支社で将校を見たということだけだったんです」

「……本当にAさんはその将校を見たと思いますか」

法務省はもちろんですが、外務省、警察庁にAさんの件を報告しました、と有美が肩をすくめた。少年のような仕草だった。

「調査はできないというのが結論でした。Aさんはその時八十五歳で、視力が低下していましたし、確かな証拠はないというのがその理由です。ただ、Aさんは最期までしっかりした方でしたから、間違えたのではないとわたし自身は思うようになっていました。被害者の会に現れた時の顔を思い出すと、本当に見たのだと信じています」

「それから、どうしたんです？」

「企業情報を調査する民間業者に依頼して、片山興産のことを調べました。二〇〇九年まで、片山興産が北島建設という暴力団系列の建設会社だったこと、同年秋、ニワタコーポレーションという金融会社が全株を取得し、社名変更したこと、会社の規模や取引先、社員数、社長以下役員の名前、その他多くのデータが集まりました。ですが、詳細な内部事情まではわかりません。民間の会社では、それ以上調べるできないんです。片山興産新潟支社にはわたし

や被害者家族の会の担当者が行き、事情を聞きましたが、心当たりはないということでした。その一年後、支社は閉鎖され、社員は全員東京本社に戻っています」

「事情を聞くと言っても、Aさんは写真すら持っていなかったんですよね？ それでは調べようがないでしょう」

「わたしがAさんから聞いたのは、七十代の背の高い男ということだけです。該当する者は当社にいません、と回答がありました。新潟支社長をはじめ、社員は協力的でしたし、社員名簿も見せてもらったのですが、それ以上はどうすることもできませんでした」

「でも、あなたは調べ続けた？」

「どうしても諦めがつかなくて、城下先生に紹介していただいた国交省など他の省庁を通じて、片山興産のバックを探りました。先生のお力もありましたし、わたし自身も拉致被害者の家族です。力を貸してくれる方はいました」

「何かわかりましたか？」

調べれば調べるほど、わからなくなりましたと有美がアイステイマーをストローでかき回した。

「この一年、新規の建設関係の仕事を受注していません。数年前から関わっている八王子の道路工事など、継続している仕事はありませんが、事業規模が縮小しているのは確かです。社員数は六百人、人

件費だけでも年間三億円前後が動いているはずですが、今請け負っている工事だけではとても支えきれないでしょう。会社を維持していくのも厳しいと思います」

「売上が減っているという話はぼくも聞きました」

「調査会社によると、社員は会社に隣接している寮で暮らし、そこから会社へ出勤しています。工事現場へ直行する社員もいますが、多いとは言えません。ほとんどの社員は会社の敷地内から出ていないです。仕事を受注するための営業活動もしていませんし、工事現場にも行かないなら、社員は何の仕事をしているんでしょう？」

「確かに……妙ですね」

「そもそも、社員がどうやって生活しているのか、それもわかりません。食事は会社の寮で取っているようです。定期的に社員が安売リスーパーで食材を買い込んでるのは、報告書にもありました。社員は常に会社において、食事は自炊？ 社員のほとんどは二十代、三十代で、飲みにも行かず遊ぶこともせず、ただ会社で仕事だけをしているなんて、信じられません」

新興宗教では、と志郎は言った。新興宗教の信者が外界との接触を拒むのは珍しくない。

独特の教義があり、それに従って生活しているとすれば、それなりに筋は通る。

「わたしもそう思いましたが、取引先のゼネコンに確認すると、宗教に勧誘されたことはなかったそうです。よくわからない会社と言うしかありません」

「そうですね」

「わたしは何度か片山興産へ行っています。外から見ただけですが、まず姫原村ひまはらの奥に六百人規模の本社があることに違和感を覚えまして。定期的に調査を依頼していますが、この二年、社員たちの生活はまったく変わっていません。もしかしたら、片山興産に社名を変更してから、ずっとそうなのかもしれません。六年間、六百人の社員が会社の敷地内で暮らしている……常識では考えられません」

本当に新興宗教かもしれませんが、と志郎は腕を組んだ。

「ぼくはあの会社に行ってますが、そういう雰囲気はありません。総務部長や社員の真田社長に対する傾倒ぶりは、宗教的な感じがすると思っただのを覚えています。確かに、真田社長にはある種のカリスマ性があるんですよ。社長には会いましたか？」

法務省の上からストップがかかりました、と有美が首を振った。「事情はわかるが、法務省の職員がそこまですれば問題になると……名前はわかっていますが、会ったことはありません」

頭のいい男です、と志郎は言った。

「言葉に重みがあつて、説得力のある人物でした。宗教的と言って

もいいでしょう。四十三歳だそうですが、あれだけ求心力のある人はめったにいないと思います」

「そうでなければ、何年もあんな暮らしを社員に強制できないでしょう、と有美がうなずいた。

「ただ、今年の春頃から、人の出入りが多くなっていると報告がありました。早朝、数台のトラックで外へ行き、翌日まで戻ってこないことも珍しくないそうです。建設会社ですから、深夜の作業があるのかもしれませんが……」

「他には？」

「新しい社員寮を建てています。本社の裏にあるので、全体の大きさはわかりませんが、搬入している資材の量を考えると、かなり大きな建物ようです。社員数は同じです。どうして新しい社員寮を建てているのか、わたしにはわかりません」

「手狭になったので、と総務部長が説明していました」

旧社員寮が老朽化ろうきゅうかしたとか、そんなこともあるのかもしれませんが、と志郎は言った。わからないことばかりで、と有美がため息をついた。

「社員たちの表情が暗いと調査会社の人が話してましたが、高村さんの死と関係あるんでしょうか？」

「同僚が自殺したと聞けば、明るい顔はできないでしょう」

そうですね、と有美がうなずいた。納得していないのがわかり、志郎は窓の外に目をやった。通りを乗用車やトラックが行き交っていた。

27

デスクに向かっていた数人の男が素早く立ち上がった。うなずいた真田に頭を下げてから座り直し、パソコンのキーボードを叩き始めた。

自分の方から説明に伺うつもりでした、と一人だけ立っていた背の高い男が敬礼した。あの部屋は息が詰まる、と真田は親指で天井を指した。

「現場で指揮を執る」

了解しました、と緊張した表情で答えた男に、座りたまえと真田は促した。

「順調か？」

ソファに腰を下ろし、真田は長い足を組んだ。問題ありません、と立ったまま男が答えた。

「警視庁とマスコミ各社に情報を流しています。他に数人、ネット仕事を展開しています。数時間以内に、日本中の人間すべてが橋口について知ることになり、捜索が始まるでしょう。写真もアップし

ますので、すれ違っただけでもわかるはずです。発見されるまで約十時間……遅くても明日の昼までに片がつくと考えます」

「わかった」

「警察に逮捕されるのは確かです。橋口は無関係だと主張するでしょうし、我々のことを話すかもしれません。ですが、何よりも自分の潔白を証明しなければならぬ立場です。警察はすべての事情が判明しないと動けません。彼らの責任ではなく、責任の所在を曖昧にする組織上の欠点のためです。警察がここへ来る頃、既に我々は退去しているでしょう」

うなずいた真田の顔に微笑が浮かんだ。

「身内のことは身内で対処してもらおう。我々が捜す必要はない。警察に任せる」

了解しました、と男が小さくうなずいた。状況の報告を、と真田は顔をデスクに向けた。男たちがキーボードを叩く音が高くなった。

28

片山興産に不審な点があるのは間違いありません、と有美が言った。

「紀子さんはあなたとあの会社に行ったと話していました」

そうです、と志郎はうなずいた。

「中にも入りましたよ。総務部長と真田社長に会ってます」

紀子さんが会社の印象を話してくれました、と有美が軽く目をつぶった。記憶を辿っているのが志郎にもわかった。

「社員数六百人の会社なのに、社内には数十人もいなかった。全フロアを回ってはいないが、人の気配を感じなかった。そして、女性社員を一人も見なかった……確かに、建設会社は女性に不向きな業種かもしれません。でも、総務部にもいなかったというのは……そんな会社があるだろうかと思ったそうです」

「ぼくにもそう言っていました。会社の業種や規模にもよるだろうと答えたのを覚えています。ぼくの高校は男子校で、女性は保健室に一人いるだけでした。二十年ほど前ですが、平成の話です。それが伝統なんだ、と学校は言っていましたね。片山興産もそうだったのかもしれないし、ぼくも紀子もそれほど長くいたわけじゃありません。実際には女性社員がいたのかもしれませんが、そこは聞いてないんです」

「総務部の社員や営業部で見かけたのは、二十代、三十代の男性だけだったと話しましたが、わたしが調べた範囲でもそうです。真田社長は四十歳前後にしか見えなかった、とも言っていました」
「確かにそうです。ずいぶん若い社長だなとぼくも思いました」

もうひとつ、と有美が自分の足元を指した。

「真田社長と話している時、数人の営業部員がフロアに戻ってきたのですが、スーツ姿なのに靴が汚く、ズボンの膝が破れていた人もいた、薄汚れた感じがしたと紀子さんは話してました。橋口さんは気づきませんでしたか？」

「覚えてません。紀子は昔からファッションにうるさくて、ぼくにもコーディネートを考えて、とよく言っていました。注意力はある方でしたから、社員の服装がおかしいと気づいたのかもしれませんが」

「彼らと桑山総務部長の様子も変わったと……真田社長に対し、
畏怖いふしているように見えた、徹底的な規律があり、上下関係があるのがわかったそうです。社員と社長の立場は違います。そこに節度があるのは、どんな会社でも同じでしょう。でも、紀子さんはそれ以上の何かがあると直感していたんです」

「それ以上の何か？」

「調べてみる、と言っていました。わたしも片山興産のデータを渡す約束をしました。紀子さんは高村さんの部屋に戻り、その場は別れましたが、連絡先も交換してまた会うことになっていました。轢ひき逃げで亡くなったと聞いて、わたしがどれだけ驚いたか……」

小さなため息と共に、有美が話を終えた。しばらく沈黙が続いた。
事情はわかりました、と志郎は口を開いた。

「反対するようなことばかり言いましたが、意図的にそうしたんで

す。何でも疑ってかかるのは警察官の習性で、申し訳なく思っています。実は、ぼくも紀子の死に疑いを持っています。轢き逃げではなく、殺されたと考えているんです」

「……殺された？」

有美が顔を上げた。根拠がありません、と志郎はうなずいた。

「現場を調べましたが、別の場所で轢き殺され、犯人が死体を動かした可能性があります。車の速度、ブレーキ痕、紀子の外傷、その他の状況を考え合わせると、最初から殺すつもりで轢いたのかもしれない。ですが、紀子に恨みを買うほど警察官としての経験はなかったんです。誰が、何のためにそんなことをしたのか——」

「橋口さんはどう思ってるんですか？」

有美の問いに、何とも言えませんと志郎は答えた。また沈黙が続いた。

あなたのことは紀子さんに伺いました、と有美が話し始めた。

「紀子さんは高村さんの死について、自分の考えを話したそうですね。でも、取り合ってくれなかったと苦笑していました」

そういうわけじゃないんですが、と志郎は首を振った。

「紀子はまだ刑事になって一年しか経ってません。経験不足なのは本場で、そんなに簡単な仕事じゃないんです。直感だけでは通用しません」

「婚約者の春野さんが訴えた時も、額面通りには受け取れない、と言ったそうですね。紀子さんに言わせると、兄は女性の気持ちが変わらない人だから、ということになります」

「そんなことはないつもりですよ」

でも、頑固ではないとも言っていました、と有美が小さく笑った。

「小さくても証拠があれば、一から捜査をやり直すはずだ、だからその証拠を見つけると……」

「そうですか」

「紀子さんが亡くなられたのは、ニュースを見て知りました。それからずっと、橋口さんを探していたんです。紀子さんは信頼できる人で、彼女が信じているあなたなら、力になってくれると思ったんです。品川桜署に電話をしましたが、紀子さんを轢き殺した犯人を殴って停職処分を受けていると……本当ですか？」

ノーコメント、と志郎は肩をすくめた。何度も電話をして、聞き出せたのはそれだけです、と有美が頬に手を当てた。

「言うまでもありませんが、品川桜署はあなたの連絡先を教えてくださいませんかでした。そうになると、わたしには捜しようがなくて……処分が解除された時に会うしかないと考え、その前に高村さんの婚約者、春野さんに話を聞こうと思ったんです。勤務先は紀子さんに聞いていたので、ナグー音楽事務所に電話を入れると、まだ出社して

いないと言われて、出入国管理所の職員だと伝え、住所を確認しました」

「ナグー音楽事務所が春野さんの住所を教えたんですか？ 個人情報保護がうるさい時代です。電話一本で、良く聞き出せましたね」

春野さんは海外アーティストとの仕事を担当していたと紀子さんに聞きました、と有美が言った。

「その中にコロナウイルス感染者がいた、と伝えたんです。春野さんは濃厚接触者になると話しました。もちろん、女性だったこともあったでしょう。男性だと不審に思われたかもしれません……住所がわかったので、直接自宅へ行くことにしました。携帯番号までは教えてもらえなかったのです、そうするしかなかったんです」

「それで、春野さんのマンションに向かった？」

「そうです。マンションが近いのはナビの音声案内でわかりましたが、パーキングがなくて回りを走っていると、突然橋口さんが車道に飛び出してきたんです」

「どうしてぼくの顔を知ってたんです？」

紀子さんが写真を見せてくれました、と有美が言った。

「記憶力はいいんです。驚いたのはあなたが逃げていたこと、そして数人の男が追いかけていたことです。顔を見て、てっきり反社の構成員だと……」

連中は刑事です、と志郎は苦笑した。

「人相が悪いのは否定しませんが」

「あなたを救おうと、車で追いかけてました。どうしてあんな……スタントマンみたいなことをしたのか、自分でもわかりません」

「助けてもらったのは確かです。感謝していますよ」

どうして彼らに追われていたんですかと有美が尋ねた。今度はぼくが話しましょう、と志郎は口を開いた。

「紀子の死は単なる轢き逃げ、あるいは事故ではありません。それには確信があります。理由があつて殺されたんです。高村の死が関係しているのは間違いないでしょう。春野さんは刺殺しきつされてました。おそらく犯人は同じ人だと思います」

「はい」

「春野さんの部屋へ行ったのは、ぼくが決めたことで、誰かに命令されたわけではありません。これでも刑事ですから、監視されていなかったのはわかっています。つまり、犯人は春野さんのマンションを見張っていたんでしょう。いずれはぼくが彼女の部屋に向かうとわかっていた。ぼくは彼女に何度か電話をしています、盗聴かされていたのかもしれませんが。ぼくが行くことを前提に、一石二鳥を狙ったんです。口封じのために春野さんを殺し、嗅ぎ回っているぼくを逮捕させるつもりだったんでしょう」

こんなこと言っているのかわかりませんが、と有美が視線を外した。

「犯人はどうして橋口さんを殺さなかったんです？」

ぼくを殺せば、紀子の轢き逃げも殺人だったのではないかと疑う者が必ず出てきます、と志郎は言った。

「刑事が殺されて、通り一遍の捜査しかない警察署はありません。徹底的に調べますし、犯人が逮捕されるまで捜査は続きます。それは避けたい、と犯人は考えたんでしょう。春野さんは詳しい事情を知っていたから殺すしかないが、何もわかってないぼくを殺すのかえってリスクになります」

「わかります」

おそらくですが、春野さんは昨夜の段階で監禁されていたはずで、と志郎は額を手のひらで押さえた。

「犯人はあの部屋でぼくが来るのを待っていた。駅を見張っていた仲間がいたんでしょう。ぼくを見つけ、犯人に連絡を入れ、その時点で春野さんを殺害した。犯人は逃げ、間抜けな話ですが、ぼくがこのこそこへ入っていったんです」

「犯人の罠が巧妙だったのだと思います」

「春野さんの部屋で彼女の死体を発見し、ぼくはすぐに110番通報しました。死体を見つけたと通信指令センターの担当者に話し、

状況の説明を始めようとなりましたが、その前にあの刑事たちが現場に着いていました。刑事だからわかりますが、殺人が発生すれば警察官は現場に急行します。一分で到着することもあるでしょう。ですが、十秒はあり得ません。ぼくは説明を始めたばかりで、通信指令センターの担当者に指示を出す時間はなかったんです」

「つまり？」

「ぼくが110番をするより前に、犯人が通報していたんです」志郎はこめかみを指で突いた。「刑事たちはぼくの名前を叫んでいました。品川桜署の橋口志郎だとわかっていたんです。他の所轄署の刑事がぼくの名前や顔を知ってるわけがない。犯人が名前を警察に伝えていたんです。ぼくが春野さんを殺すところを目撃したと言ったのかも知れない。刑事たちの切迫せつぱくした様子から考えると、そうしか思えません」

「誰かがあなたを陥れようとしている？」

「そうかもしれませんが、何のためなのか……」

失礼、と断って志郎はスマホを取り出し、係長の藤元かじもとの番号を呼び出した。もしもし、という不機嫌な声が出た。

「橋口です」

いつかってくるかと思ってた、と藤元が唸うなり声を上げた。

「何をしている？ 謹慎中のはずだぞ？」

「すいません。実は——」

本庁の警務課から非公式に連絡があった、と藤元が声を低くした。

「お前が春野博美のマンションに行ったことはわかってる。女が殺されていたことも、その部屋にお前がいたこともだ。はっきり言うが、面倒なことになってるぞ」

「そうでしょうね」

「お前が犯人だと断定されてはいない。だが、何らかの関係がある
と上の連中は思ってる。誰だってそう考えるさ。今、本庁や所轄しよかつの
連中が必死でお前を捜している。ずいぶん偉くなったな」

「皮肉は止めてください」

「うちの署にも責任がある。総務がお前の個人情報を本庁の捜査一
課に渡した。お前の部屋にも誰かが行ってるだろう。戻れば捕まる
し、町を歩いていても見つかる。その前にこっちへ戻ってこい。本
庁で事実を話せばいい。付き合ってやる。上司になったのはおれの
運が悪かったからで、お前の責任じゃない」

「それはどうも……しかし、どうしてこんなことになったんです？」

「今のところ、おれたちも蚊帳かやの外だ。詳しい情報は誰も教えてく
れない。ただ、お前が春野を殺してないのはわかってる。理由があ
ればやらんでもないだろうが、手当たり次第の殺人鬼じゃないのは
知ってるつもりだ。それともおれの勘違いか？」

「勘弁してください、そんなわけないでしょう……他にわかったことは？」

「紀ちゃんを轢き殺した村川むらかわだが、南部なんぶが調べてる。フリーターと言ってたが、立川の暴走族上がりのチンピラかじわきだった。門脇組かじわきとかいう小さな暴力団と関係があったようだ」

「門脇組？」

昨日会った組長の門脇の顔が頭を過ぎよった。村川には門脇の息がかかっていたのか。紀子の死と関係があるのか。

「お前が紀ちゃんが轢き殺された現場を調べていたのは聞いている。鑑識からも不審な点があると報告があった。うちから人を出して、徹底的に調べてる。別の場所で轢かれたかもしれない、とお前は大塚ドクターに言ったそうだが、それが本当なら、村川が何か知っているはずだ。おれは非暴力主義だが、そんなことも言ってもらえん。どうやってでもあいつの口を割ってみせる」

藤元がかすれた声で笑った。無茶は止めましようと言った志郎に、どの口が言ってる、と藤元が怒鳴った。

「暴力刑事はお前だろう。今、どこにいるんだ？ 何をしてる？」
「警察に追われて逃走中です」志郎は目を上げて有美を見た。「とにかく、そっちへ戻ります。いきなり本庁の連中に捕まりたくありません。ぼくの話なんか聞きませんよ。隣に上司がいれば、扱いても少

しは違うんじゃないですか？」

「さっさと戻れ」

「了解です。係長、紀子の件を調べてください。できれば、ぼくの潔白を証明してもらえると助かるんですが」

もうやってると呻いた藤元が電話を切った。どうなってるんだ、と志郎はつぶやいた。

29

黒いセダンの助手席を降り、桑山は目の前の家を見つめた。大田

区田園調布。でんえんちやうふ 駅から多少離れているが、庭つきの一軒家だ。

二人の男が背後に立った。運転席にも一人待機している。

そこにいろ、と命じてから桑山はインターフォンを押した。

「本庁から参りました桑野と申します。総監の命令です」

「本庁……ですか？」

「そうです。ご主人の部下で、同じ刑事部の管理官です」

目を上げると防犯カメラがあった。録画されているのだろうが、構わなかった。

「緊急の用件でお伺いしました。よろしいでしょうか？」

「どうぞ、お入りください」

門が自動で開いた。五メートルほどの小道を歩き、玄関扉の前に

出る。そこにもカメラがあった。

内ポケットから警察手帳を取り出し、カメラに向けると、玄関のドアが開いた。背の高い三十代半ばの女性が立っていた。色白で、黄色のワンピースが似合っている。

本庁刑事部管理官の桑野です、と桑山は一礼した。

「ご主人、中山刑事部長の下で働いています」

こちらこそお世話になっております、と中山文乃ふみのが微笑んだ。

「何かあったんでしょうか？ 今日、主人は定例の会議があつて警察庁に……」

緊急の事態が起きました、と桑山は声を潜めたひそ。

「公安部からの報告で、イスラム過激派グループがテロを企図していたことが判明しました。警視庁各部の部長宅に爆弾を送付しています。まだ公表されていませんが、国枝副総監くにえだ宅で爆発があり、夫人が重傷を負いました」

そんな、と文乃が口に手を当てた。白い頬ほおが青みを帯びる。事実です、と桑山は低い声で言った。

「公安部が犯人の一人を逮捕しましたが、所持していたリストに中山刑事部長の名前が載っていました。私も見ていますが、間違いありません」

「まさか——」

「郵便関係は押さえました。宅配便その他もです。しかし、直接ご自宅を襲撃する恐れがあります。お伺いしたのは、奥様とお嬢様の保護を命じられたためです。本庁までお連れします。今、対策会議中ですが、本庁舎内は安全だと……」

軽い足音に続き、だあれ、という幼い声が聞こえた。母親の足元に駆け寄ってきた少女の手を文乃が握った。

「ママ、どうしたの？」

少女が整った顔を上げた。大丈夫よ、と文乃がうなずいた。車が玄関前で待機中です、と桑山は囁いた。

「我々の指示に従ってください」

「わかりました。主人に電話を……」

「もちろんです。部長も心配しておられます。わたしからも連絡を入れますが、無事だとお伝えください。ですが、その前に車に乗っていただけですか？ 車は防弾仕様でテロリストの攻撃に耐えられますが、ここで襲われたら対処できません」

すぐに、とうなずいた文乃がリビングのテーブルにあったスマホとエルメスのポーチを掴んだ。

どうしたの、と見上げている娘を抱き上げ、心配しなくていいと顔を覗き込んだ。

「パパが守ってくれる。小夜子のパパはおまわりさんでしょ？ だ

から、絶対にだいじょうぶ。わかるよね？」

お急ぎください、と桑山は玄関のドアを大きく開いた。文乃がパンプスをはいて外に出る。小夜子はキャラクターのついたスニーカーだ。

文乃がポーチからICタグを取り出してノブの辺りにかざすと、小さな緑のライトが赤に変わった。鍵がロックされていた。

桑山に続いて、母娘が門を出た。男たちが油断なく周囲を窺^{うかが}っている。

桑山は車の後部座席のドアを開け、奥様とお嬢様はこちらへと行った。少々窮屈^{きんくつ}ですがご辛抱を、と座っている文乃と小夜子を挟んで、二人の男が乗り込んだ。

桑山はドアを閉め、助手席に回った。シートベルトを、と運転者が指示している。

文乃が自分と娘の体にシートベルトを装着した。手を振った桑山に、うなずいた運転者がアクセルを踏み込んだ。

車が走りだし、スマホを取り出した文乃が画面に触れた。

「もしもし、あなた？ 文乃です……今、家を出ました。小夜子も一緒です。心配しなくても……あなたは無事なんですか？ 警視庁の桑野管理官がお見えになって……」

失礼、と桑山は手を伸ばした。

「電話をお借りできますか？ 私から説明した方がよろしいでしょう」

二人の男が両脇から文乃の腕を押さえた。桑山はスマホを取り上げ、もしも話しかけた。

30

ファミレスを出たのは、話の区切りがついたすぐ後だった。一カ所に留まっていることができない逃亡者の気持が実感できた。

有美の車はそのままコインパーキングに置き捨てた。ナンバーが割れているから、いずれは見つかるかわかっていた。

「どうしますか？」

歩きながら有美が聞いた。二人ともマスクをかけているが、コロナ禍でのマナーだから、不自然ではない。

高性能な防犯カメラはマスクの有無にかかわらず、人物を認識できるが、まだ設置台数は少ない。しばらくはごまかせるだろう。

落ち着いて考えてみたいですね、と志郎は言った。

「署に戻れば、動きが取れなくなります。その前にできることがあるかもしれません。いろいろ考えてみないと……」

「当てはあるんですか？ 自宅は見張られているんですよね？」

「上司はそう言っていました」

わたしの家はどうぞでしょう、と有美が足を止めた。

「大森おおもりですから、割りと近いです。橋口さんとわたしは今日初めて会ったので、警察も気づかないでしょう」

「いいんですか？」

仕方ありません、と有美が苦笑した。志郎はその顔に目をやりながら考えた。

喫茶店やレストランは駄目だ。ホテルも危険だろう。親戚や親しい友人の家には本庁の刑事が向かっているはずだ。他に選択肢はない。

手を挙げると、タクシーが停まった。

「車の方がいい」有美を押し込むようにして、志郎は後部座席に乗り込んだ。「駅には防犯カメラがある。電車は使えない」

大森駅の方へ行ってください、と有美が言った。うなずいた運転手がアクセルを踏んだ。

三十分ほど走ったが、車内では話さなかった。運転手に聞かれたくなかったし、考えをまとめる方が先だ。

誰が、何のために紀子を殺したのか。高村を自殺に見せかけて殺したのはなぜか。

タクシーが大森駅の北口から住宅街に入っていた。コンビニに寄って飲み物を買ひ、ATMで金を下ろした。

数分走ると、ここでいいですと有美が言った。タクシーが停まった。

先に降りた有美が赤い外壁の建物を指さした。マンションではなく、アパートだ。尖った屋根のデザインが特徴的だった。

階段で二階に上がった。四階建てで、各階に部屋が二つずつあるのがわかった。有美が2号室とプレートのなかった部屋の鍵を開けた。

中は1Kで、狭かった。六畳ほどのフロアリングに、申し訳程度のキッチンがついているだけだ。

小さなデスクにノートパソコンが一台載っている。テレビはないが、パソコンで見ているのだろう。

壁は三面とも本棚で塞がれていた。それ以外何もない。三十一歳の女性が住むには殺風景な部屋だった。

座ってください、と有美がデスクのウッドチェアを指し、キッチンから持ってきた丸椅子に腰を下ろした。ノートパソコンをデスクの端に寄せ、空いたスペースに志郎は買っていたペットボトルを置いた。

「恥ずかしいんですけど、食器はほとんどありません」有美が困ったような表情を浮かべた。「部屋では食事しないんです。飲み物はコンビニで買います。だから食器の必要がなくて……」

「入国警備員は入国管理局の所属ですよね」志郎はペットボトルのキャップを開けた。「公務員ですから、給料もそれなりにありますよね？ それにしては……」

警察官ほど給料は高くありません、と有美が薄笑いを浮かべた。

「不自由はしてませんが、わたしは拉致被害者家族の会の活動もあって、福井、新潟、他県へ行くことが多いんです。それは自費ですから、家賃を抑えるしかないんです」

「お兄さんが拉致されたのは二十八年前ですよ？ あなたは十代の頃からお兄さんを捜し続けている。気持はわかりますが……」

「両親は共働きで、わたしは兄に育てられました」有美がペットボトルに手を伸ばした。「まだ小さかったので記憶は曖昧ですけど、優しかったのはよく覚えています。兄が大好きでした。いなくなった寂しさは、言葉にできません。生きていてほしい。もう一度会いたい。それだけを願っています」

「お兄さんが羨ましいうらやいです。紀子とは口げんかばかりで——」

「そんなことはないと思います。紀子さんは橋口さんのことをとても楽しそうに話していました。仲が良かったんですね」

「……どんなお兄さんだったんですか？」

「わたしのことをいつも見守っているのは、子供心にもわかりました。誰に対しても優しくかったと思いますけど、わたしが寂しさを感じ

じないように、とても気を配っていました。三歳の時、つまずいてストーブに倒れ込んだことがありました。飛び込んできた兄がストーブを素手で動かして、わたしは無事でしたが、兄は手に大火傷を負いました。だけど、大丈夫か、大丈夫かって……あの時のことははっきり覚えています」

反省しないといけないな、と志郎は苦笑いを浮かべた。

「ぼくは紀子を何度泣かせたかわからない。よく母に怒られたもんです」

志郎は部屋を見回した。冷静さを取り戻しているのが自分でもわかった。

「忙しいのはわかるけど、この部屋では寝るだけ？」

意識的に言葉遣いを変えた。有美の方が年下だし、その方が自然だろう。

そうですね、と有美がうなずいた。

「物が少ないけど、収納は？」

玄関に有美が顔を向けた。

「靴箱の横にスペースがあるんです。公務員ですから、そんなにオシャレな服を着ることもないですし」

「平日は入国警備官として働き、休日は拉致被害者家族の会の活動？ 大事なことなのはわかるけど、君には君の人生があるんじゃない？」

ないか？ お兄さんを探すのはいいが、もつと余裕を持って……」
「たまに、わたしもそう思うことがあります。でも、諦めることは
できません」

「どうして？」

「拉致されていたのは、わたしだったかもしれないからです」

有美がお茶を飲んだ。どういふことだ、と志郎はつぶやいた。